

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に H B 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の ア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や**。**や**「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) ひもで結った小包。
- (2) 頑是ない子ども。
- (3) 役務の提供。
- (4) 家畜を殖やす。
- (5) 時期尚早の決断。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 実力のタカが知れる。
- (2) ズに乗る。
- (3) コウミヨウ心。
- (4) みんなに可愛がられるシヨウブン。
- (5) リヒキヨクチヨクを明確にする。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

高校生になって、二人でカヌー部を立ち上げた。二年生になり、恵梨香と舞奈が入部してきた。⁽¹⁾二人だけだった世界は急激に広がり、互いに見えていたものが違ったことに気が付いた。

だから希衣は、千帆にヒーローの役割を押し付けることをやめた。勝手に期待して、身勝手な振る舞いをしていたのは希衣だった。千帆は千帆の生き方があるのだから、それを尊重すべきだったのだ。

それから、二人は良い関係を取り戻した。文部科学大臣杯では一時的にペアを復活したし、フオーを始めてからはペア以外の関係性も生まれた。希衣は千帆に発破を掛けるのではなく自分の記録を伸ばすことに専念するようになったし、その結果、明らかに能力は飛躍した。

今の希衣は、千帆よりも速い。数字が証明しているのだ、その事実を揺るがない。

「鶴見先輩。」

掛けられた声が、思考に耽^{ふけ}っていた希衣の意識を引き戻した。ハッと顔を上げると、いつの間にか艇はスタンバイスペースに入っていた。恵梨香がじっとこちらを見ている。

「な、なに？」

「いや、ぼーっとしてたので。そろそろレースが始まりますよ。」

「ああ、うん。」

予選レースで一位だった恵梨香は、一番真ん中の第五レーンを割り当てられた。希衣はその右隣の第四レーン、さらに右の第三レーンに千帆がいる。第九レーンの舞奈とは距離がある。レースが始まったらすぐに視界に入らなくなるだろう。

「発艇、三分前。発艇、三分前。選手は発艇線二〇メートル後方で艇を

揃えてください。」

アナウンスが聞こえ、それぞれの艇が自分のレーンへと移動する。赤、青、水色、黄色。カラフルなスプリント艇が並ぶ様は、上空から見ると箱に収まった色鉛筆のようで美しいかもしれない。

艇の先端——艇首を目視で揃えるのは新人には難度が高い。ゆっくりと艇を前進させながら、希衣は第九レーンの舞奈がいる方向に顔を向けた。落ちていないだろうかと心配に思い、すぐにその思考を追い払う。舞奈はもう立派な選手だ、過保護に扱うのは失礼だろう。

ふう、と深く息を吐き出す音が希衣の右隣りから聞こえてくる。レース前、千帆は静かだ。身体⁽²⁾の表面に緊張感を纏^{まと}い、ゴールに向かって意識を集中させている。

希衣は目を凝らす。快晴の空の下、等間隔に並んだブイの奥にぼんやりとゴールが見えている。

「鶴見先輩。」

もう一度名を呼ばれ、希衣は驚いて左側へ顔を向けた。W K ー 1 のレース直前に恵梨香が話しかけて来ることは珍しい。

「なに？ 今はぼーっとしてないけど——。」

「負けるって、悔しいことですよ。」

希衣の言葉を遮り、恵梨香がピシャリと言い放つ。咄嗟^{とっさ}に息を呑んだ希衣から、恵梨香は目を逸^そらさなかった。

「負けたらいつだって悔しいよって、前に先輩が言ったんじゃないですか。負けるのが当たり前だと思ってる状態はおかしいと思います。」

「当たり前ってわけじゃないよ。本当に、いつも全力でやってる。」
「嘘^{うそ}ですよ。心の底から勝ちたいって思ってる。そういう態度、私は許せません。」

偽りのない本心に、ガツンと頭を殴られた。ピンク色のキャップを目^ま深^{ふか}に被^{かぶ}り直し、恵梨香はパドルの先端で水面を叩^{たた}いた。水飛沫^{みずしぶき}が上がり、

そしてすぐに消える。

(3)——悔しいです。先輩、私、やっぱり悔しい。

涙混じりの声が、不意に脳裏に蘇る。それまで負けてもなんとも思わないと言っていた恵梨香が、関東大会のWKK―決勝レース後に吐いた台詞だ。^{*}孤高の女王に実力でねじ伏せられ、恵梨香は悔しさに身を震わせていた。

「勝ってください。」

そう、恵梨香は言った。同じレースに出艇する相手に掛けるには相応しくない台詞だった。

いつの間にか目元に滲んでいた汗を手で拭い、希衣はストレッチャーに掛けた足先を軽く丸めた。グー、パー、と繰り返していく内に、硬直していた身体がほぐれていく。

「それ、湧別さんにも勝って言ってる?」

「勿論。まあ、負ける気はしないですけど。」

「私だって負ける気はないよ。」

「じゃあ問題ないですね。」

話は終わったとばかりに、恵梨香が前へ向き直る。希衣もまた、ゴールへと目を向けた。

レースの開始が近付き、艇を揃える為の指示がひっきりなしに飛び交っていた。レースに参加する選手たちは、誰もが同じラインに立っている。スタートの位置は平等で、誰にでも勝つ可能性が残されている。

「Ready」

響く声に、希衣はパドルを構える。足の裏に力を込め、大きく息を吸い込む。

「set」

身体が動く。度重なる練習によって染み付いたフォームが、いつの間にか再現される。

「go」

その刹那、パドルが水を薙いだ。跳ね上げられた水の粒が周囲にまき散らされる。

ロケットスタートは千帆の得意技だ。短距離の方に適性がある彼女は、最初の加速がとにかく上手い。しかし、体力がないためにそのスピードを維持できない。

希衣は唇の端を舌で舐める。最初に出遅れるのは想定内、問題はそこからどうやって自分のペースに持つて行くかだ。

パドルを動かす。ストレッチャーを踏み込む。激しく動く上半身と下半身が、綺麗に連動しているのを感じる。一年前に比べて、希衣のフォームは明らかに美しくなった。それなのに何故、千帆には勝てないのか。その理由を、希衣は心のどこかで察している。

隣を進む千帆を見ると、そのペースに合わせようと身体が勝手に動いてしまう。ペアだった頃の無意識の習慣が、今もお身体の内側を蝕んでいるのかもしれない。あの頃、希衣は千帆みたいになりたかった。千帆のように、速く。

二〇〇メートル地点に差し掛かった時には、前を進んでいた千帆の艇に追いついていた。希衣の乗る水色の艇の先端が、滑らかに水面を切り開いていく。千帆の赤い艇と、希衣の水色の艇がピタリと横並びになる。躊躇いは、一瞬だった。

水面に深く差し込んでいたパドルを引き抜く。一段とピッチを上げ、推進力へと結びつける。明確な自分の意思で、希衣は千帆の艇を追い抜いた。

ピタリと横並びだった二つの艇のシルエットが徐々に形を変えていく。希衣の視界に、もう赤い艇は入らない。長細い艇首が、ぐんぐんと新しい道を切り開く。

三〇〇メートル地点で、前を進むのは二艇。第六レーンの亜美と、ずっ

と前にいる恵梨香だ。亜美は昔から荒れた環境に強かった。風が強い日、水量が多く波が荒れる日、気温が低い日。皆が調子を落とすタイミングでも、彼女のタイムはほとんど変わらない。驚異的なペース維持能力が、^{しど}宍戸亜美の強さだ。

だが、今日のようなカヌー日和にはその特性は発揮されない。視界の端に亜美の姿を捉えながら、希衣はゆっくりと加速していく。それに合わせるように亜美も同じだけ速度を上げた。互いが互いを牽制^{けんせい}しながら、付かず離れずで二艇は進む。

距離を教えるブイの色が赤く変わる。残り一〇〇メートルのサインだ。四〇〇メートル地点を通過し、勝負を仕掛けたのは希衣だった。ぐつと踏み込む足に力を入れる。腕も脚も重い。それでも、速度は絶対に落とさない。

六位以内であれば関東大会には出場できる、そんなことは分かっている。一位以外はインターハイには進めない。二位でも三位でも、表彰の順位が変わるだけ。だが、そんなのはどうでもいい。負けたくない。勝ちたい。一つでもいい順位になりたい！

0・001秒を縮めるために、これまでの努力はあったのだ。もはや、亜美のことなどどうでも良かった。希衣の目に映るのは、前方にあるゴールだけ。

最後はがむしゃらだった。残された体力を絞り出し、希衣は必死に腕を動かす。⁵水色の艇が飛沫を浴びながらゴールラインを越える。その瞬間、先にゴールしていた恵梨香が歓声を上げた。

「先輩、二位ですよ！」

その言葉に、希衣はようやくパドルを動かす手を止めた。ゴール直後のせいで心臓はバクバクしているし、耳はなんだかくぐもって聞こえるし、呼吸はずっと荒いままだ。右手の甲を頬に押し付けると、肌がやけに熱かった。

「希衣に負けたあ！」

続いてゴールした亜美が、地団太を踏むようにゴトゴトと艇を揺らしっている。激しく動いても艇が傾く気配が一切ないのは流石^{さすが}といったところだろうか。

その後、後ろにいた選手たちが続々とゴールする。四位になった千帆は汗と飛沫でベタベタになった顔を手で拭うと、花が綻ぶように小さく笑った。

「ようやく負けたよ。」

深い感慨の込められた声に、希衣も思わず頬を緩める。

「うん、勝った。私、千帆に勝ったよ。」

自分では抑えているつもりだったのに、興奮で声が上擦った。

(武田綾乃「君と漕ぐ4」による)

〔注〕フォア——四人で漕ぐカヌーの競技。

スタンバイスペース——競技の各レーンに入る前の待機場所。

落ちていないだろうか——競技用カヌーは安定性が悪いため、バランスを崩して水に落ちていないか心配

していること。

ブイ——距離やコースを示す標識。

WK-1——女子カヤック一人乗り。カヤックは足を前方に伸ば

して座り、両側に水かきのあるパドル^(かい)で漕ぐカヌー。

孤高の女王——他校の有力選手の異称。

ストレッチャー——カヌーの内部に付けられた足掛け。

〔問1〕⁽¹⁾ 二人だけだった世界は急激に広がり、互いに見えていたものが違ったことに気が付いた。とあるが、「希衣」の「千帆」に対する

以前の態度の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 千帆の存在ばかりに固執して、かたくなに新たなペアを組むことを拒むような態度。

イ 千帆の自主性に配慮しないで、独りよがりペアの練習で負荷を掛け続けるような態度。

ウ 千帆の実力を過大に評価して、やみくもに競技の成績を伸ばそうと焦るような態度。

エ 千帆の思いを考慮しないで、一方的に競技での主役としての活躍を期待するような態度。

〔問2〕⁽²⁾ 身体からだの表面に緊張感まどを纏い、とあるが、この表現の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア レース直前の千帆は、人を寄せ付けない強い緊迫感に包まれているということ。

イ レース直前の千帆は、意識的に感覚を抑えて神経を研ぎ澄ましているということ。

ウ レース直前の千帆は、抑制的で落ち着いた集中力を漂わせているということ。

エ レース直前の千帆は、身体を動かして集中を高めようとしているということ。

〔問3〕⁽³⁾ 涙混じりの声が、不意に脳裏よみかえに蘇る。とあるが、なぜか。理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 勝敗に執着する態度に、強い者に負けても気にならないと言っていた恵梨香と矛盾するような気がしたから。

イ 悔し涙さえ流して先輩の甘さを指摘する恵梨香の言葉で、どれほど真剣に伝えたいのかがよく分かったから。

ウ 率直に競技者としての思いを伝える恵梨香の姿に、以前のレースで負けた時の悔しがる様子が重なったから。

エ 先輩に対して堂々と自分の考えを主張する様子で、かつての恵梨香の控えめな態度が思い出され驚いたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ それなのに何故なぜ、千帆には勝てないのか。とあるが、「希衣」が考えている「千帆に勝てない」理由を、次の□□のように説明するとき、□1□と□2□に当てはまる表現を、それぞれ三字以上六字以内で本文中から抜き出せ。

ペアとして調子を合わせてきた□1□によって、身体の動きが制限され、かつて目標だった千帆を、進んで□2□くことが出来なから。

〔問5〕⁽⁵⁾ 水色の艇が飛沫を浴びながらゴールラインを越える。とあるが、レース後の登場人物の状況の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 希衣は、最初は疲労で安心していましたが、やがて喜びを自制できなくなり恥ずかしく感じている。

イ 恵梨香は、後続の順位に注目していたが、希衣が実力どおりに千帆に勝ったことを喜んでいる。

ウ 亜美は、希衣に敗れたことを悔しがっているが、艇を揺らさないだけの冷静さは維持している。

エ 千帆は、希衣に負けたことを少し悔しがっているが、上位の大会の出場権を得て満足している。

〔問6〕 次は、A～Dの男女四人の生徒が、本文の特徴について発表するために話し合っている場面である。

当てはまる最適な表現を、1は本文から一文で抜き出し、

2は、二十字以上二十五字以内で考えて答えよ。

A ここでは希衣が主人公だ。

B そう。内面の描写は希衣についてのものばかりで、他の人物の心情も希衣の視点から描かれてる。表現上の特徴はどうか？

C 1という箇所は、擬人法だよ。どんな効果があるだろう？

D 希衣が自分の殻を破った場面だから、今までと違う新しい境地になつて勢いづいている様子が効果的に表れているんじゃないかな。

C 確かに、そうだね。

A 他には擬態語も目立つかな。

B 擬態語があると、動作の調子や背景の思いが示されて、鮮明な印象になるね。

A 擬態語の多用は、競技前後の敏感な心理と関係がありそうだ。

D 他にはない？

C 言外に想像させる表現が、あると思った。

B たとえば、どんなところ？

C あまり自信がないけれど、「その事実揺るがない」という表現には、しかし……というニュアンスが隠れている感じがする。

A ……ああ、なるほど。確かに、実力では上なのに、しかし勝てない、というように読めるよね。

D 競技開始後の、「一年前に比べて、希衣のフォームは明らかに美しくなった。」「それなのに」「勝てない」という箇所と同じだね。

C すると「一年前に比べて、希衣のフォームは明らかに美しくなった。」は「今の希衣は、千帆よりも速い。」と内容ということか。

B おもしろいなあ。ほかにもあるかな……。

A スタート前のカヌーの描写「上空から見ると箱に収まった色鉛筆のようで美しいかもしれない」という所にも言外の意味があるかも。

C どんな意味？

A 一見すると綺麗に大人しく並んでいる光景のように見えるが、しかし2という意味にも取れないかな？……

D それ十分成り立つ解釈だね。さて、どれを発表しようか迷うな。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

行為を倫理的に評価するのも、ヒュームによれば、究極的には感情である。評価とはその行為にたいする賞賛または非難であり、この両者もまた感情だからだ。こうして倫理的判断を感情にもとづけて説明する倫理論が試みられる。

⁽¹⁾ とはいえ、この試みには最初から懸念がつきまとう。理性で考えるなら、誰もがいつでも同じ結論にたどり着く可能性がまだしも見込めそうだが、感情にはそのような普遍性や安定性は期待できそうにないからだ。同じような事態をみてもその行為者やその行為によって影響を受けるひとが自分自身や自分の家族や友人か、はたまた無縁のひとかによって感情の反応は変わってくる。そのうえ自分自身が他の用務に氣をとられていたり疲れていたりすることで、感情は左右される。生活を支える倫理がそのように不安定ではいけない。⁽²⁾ したがって、まずは、倫理的判断の基礎になるものとして、誰もがいつでもどこでも同じ事態にたいして同じ反応を示すという感情が存在することを証明しなくてはならない。

ヒュームはこう説明する。歴史書を読んでいるとしよう。私たちは卑劣な行為に義憤を感じ、立派な行為に讃嘆する。^{*さんたん}過去のできごとはもはや私たちの利害と関わりない。それでも是非の区別は変わらない。他国と交戦中だとして。立派な行為は敵がしたのであってもあつぱれと思ひ、非道な行為には味方がしたのであっても眉をひそめる。第三国からみて自国の不利になるそのような事態でも、感情が下す評価は変わらない。一般化すれば、自分の利害になんら関係のないに、ひとの幸福を見聞きして朗らかな気持ちになり、ひとの身に起きた不幸に心を曇らされた体験は、誰にも覚えがあるにちがいない。だから、ひとの幸福を喜び、

不幸を悲しむこの共感(sympathy)という感情は誰にでもあると、ヒュームは結論する。

だがそれなら、世の中はもつとよくなっているはずである。そうならないのは、たしかに共感する能力は誰にでもそなわっているが、その能力は多くのひとにあつて微弱なものであり、善行の遂行と悪行の断念に直結するものではないからだ。では、どうすればよいか。

ヒュームはこう勧める。「当事者の立場に身をおいて考えよ」。このとき状況を知るために理性を働かせる。そのひとがおかれている苦境をくわしく知れば知るほど、たとえ弱々しい共感しかもっていない人間でも共感をかきたてられ、そのひとの役に立つ行為を、しかも理性による把握のもとに状況に適したしかたでする気になり、実際に行なうだろう。⁽³⁾ だからといって、「相手と同じ気持ちになれ」とまで要求する必要はない。共感を抱いているとしても傍観者が当事者と同じ気持ちになれる保証はない。しかし、それでよいのである。なぜなら、重要なのは、相手のためになることを実行することだからだ。

個別の状況に注視するのは、ヒュームがイギリス経験論の哲学者だからである。イギリス経験論によれば、生まれつきそなわっている知識はなく、知識は経験をとおして獲得される。普遍的な概念はそれまでの経験から共通の性質を抽出して作られるにすぎない。したがって、人間や人間一般を対象として感情が働くことはない。だから、共感とは人類愛や博愛ではない。共感はそのときその場所で苦しんでいる特定のそのひとに向けられるものである。

共感の存在をヒュームは、各人が自分の経験を思い出すように促して、つまり内観にもとづいて論証した。⁽⁴⁾ 現代では、認知科学、脳神経科学などのさまざまな分野で共感の存在を実証的に説明する試みがなされている。ここでは進化人類学者マイケル・トマセロ（一九五〇—）の知見

をみてみよう。

大型類人猿も群れで協力して狩りをする。獲物を追う者、取り囲む者、行く手を阻む者——だが、その行為を人間の協働作業のように解釈するのは誤りである。チンパンジーでは、それぞれが獲物を捕らえる機会を最大化する行動をしているにすぎない。そうして得られた成果を独占しようと行動し、他の個体の要求や嫌がらせに応じてやむなく相手に譲る。

これにたいして、ヒトの三歳児は、おとなから誘ったゲームをおとなが急にやめるとゲームに戻るように要求し、他のおとなに別のゲームに誘われて前のおとなから離れるときには、わびるかのように、おもちゃを手渡したり、顔をのぞき込んだりしながら去っていく。おとなの行動をみて、おとなのしようとしていることを把握してその手伝いを進んでし、もしおとながそれまでのやり方を変えようと、生後一八カ月の幼児でも観察されるように、従来のやり方に戻そうとする。さまざまな対照実験をおして、子どもは協働作業——それによって得られる利益と無関係に、ときには自分の利益に反しても——維持する行動をすることが明らかにになっている。

ヒトの幼児とチンパンジーの違いは、トマセロによれば、自分を含む複数の個体から成る関係を同一の目標を志向する「私たち」として捉える意識の有無にある。ヒトの幼児は、協働しなければその行為の目的が達成できないことを把握する。そのために自分が何をすべきかを把握する。いいかえれば、自分の行動にたいする規範的な視点を身につけ、同時にまた、相手が何をすべきかを把握している。それはすなわち、他者を含めた社会的に規範的な視点を身につけているということにほかならない。さらには、やり方の変更を嫌いもする。このことから察せられるように、「この協働作業では、誰もがこうすべきだ」という一般化した規範の視点を、子どもは早い段階で身につけている。

ヒュームが内観によって到達した考えを現代の諸科学は観察と実験に

よって裏づけているわけだが、こうしたアプローチが論証しようとしているのは、倫理学が成り立つ基盤は人間にもともとそなわっている素質、いいかえれば自然のなかに存しているという考えである。むしろ、それはヒトという生物種にその出現時点でそなわっていたものではなく、(ヒュームの時代には今ほど説明されていなかった) 進化の過程で生き延びるのに有利な方向へとヒトが適応してきた成果にほかならない。けれども、すでに幼児の段階で身につけているほどに、ひとりひとりの個人にとっては自然と呼んでさしつかえない所^{*}なのである。

とはいえ、倫理の成り立つ基盤が自然のなかにあるということが論証されたとしても、それで個々の人間が現実には倫理的なふるまいをするかどうかは別である。たとえ、共感が素質としてそなわっているとしても、他方で私たちはホップズの描く孤独な利己的存在者たちによる万人の万人にたいする戦いという人間の描像にも相応のリアリティを感じるだろう。だからこそ、誰もが共感能力をもっていると主張したヒュームはまた「他人の立場に身をおいて考えよ」と勧告せざるをえなかった。⁽⁵⁾ここに、たとえ倫理の成り立つ基盤が自然のなかに存することが実証されたとしても、なお倫理学が引き受けるべき役目が残っている。

見方を変えればこうもいえる。倫理の自然化を説明するさまざまな分野の経験科学は「いかにして (how) その事態が生じたか」を説明する営みである。人間において共感能力が発達してきた経緯を理解できれば、その条件を人為的に構築して共感能力をいっそう発揮しやすい状況や性格を形作ることさえも不可能でないかもしれない。ところが、たとえそのように利他的な行為に進みややすい舞台が整ったとしても、依然として人間は「なぜ (why)、自分は今ここでその行為をすべきか、自分がそれをしなくてもいいのではないか」と問うにちがいない。この「なぜ」は科学が究明する問題ではない。倫理学の問題である。

(品川哲彦「倫理学入門」による)

〔注〕 ヒューム——イギリスの哲学者。

讃嘆——感心して、ほめること。

イギリス経験論——十七世紀から十八世紀にかけて、イギリスで

栄えた哲学。

所与——あらかじめ与えられているもの。

ホッブズ——イギリスの哲学者。

〔問1〕⁽¹⁾ とはいえ、この試みには最初から懸念^{けねん}がつきまとう。とあるが、「懸念^{ねん}」とは具体的にはどのようなものか。次のうちから最も適切なもの

のを選べ。

ア 感情は、倫理的判断を下す際の絶対的な基盤になりうるものだが、賞

賛や非難という主観的なものに偏ってしまうのではないかというもの。

イ 感情は、行為者やその状況、行為を受ける人が誰かによって変化する

ため、倫理的判断の基盤とするには不適切なものではないかというもの。

ウ 感情は、倫理を支える理性を鈍らせてしまうものであるため、平等な

判断を誰に対しても行うことができなくなるのではないかというもの。

エ 感情は、非常時であるなら、倫理的判断の基盤として用いるのもしか

たないが、日常生活においては好ましくないのではないかというもの。

〔問2〕⁽²⁾ したがって、まずは、倫理的判断の基礎になるものとして、誰

もがいつでもどこでも同じ事態にたいして同じ反応を示すという

感情が存在することを証明しなくてはならない。とあるが、ヒュー

ムはどのように証明したのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 戦争状態では誰もが自国のあらゆる行為を賞賛することを指摘し、同

一の状況では誰でも同じ感情となるのが普通であることを示した。

イ 歴史書を読んだ人々の感情の共通性を見つけ、眼前の出来事ではなく

過去の出来事に対してなら誰もが共通の感情をもつことを示した。

ウ 利害関係のない出来事に対する人々の反応を分析し、理性を抑制する

ことで人間は他者に対して普遍的な感情を抱きうることを示した。

エ 歴史的な出来事に対する人間の感情に共通するものを指摘し、無関係

な対象への共感の働きが人間にとって普遍的であることを示した。

〔問3〕⁽³⁾ だからといって、「相手と同じ気持ちになれ」とまで要求する必要はない。とあるが、なぜか。これを次の……のように説明するとき、

1

と

2

に当てはまる最も適切な表現を、本文中から

1

は五字、

2

は十七字で探し、そのま
ま抜き出して書け。

ヒュームによると、相手の置かれた

1

を理性の働きによっ
て詳しく知ること、

2

ができるようになりさえすればよ
いから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 現代では、認知科学、脳神経科学などのさまざまな分野で共感の存在を実証的に説明する試みがなされている。とあるが、本文ではどのように実証されていると述べられているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア ヒュームが歴史的な出来事や戦争行為を想定して実証した共感の存在を、進化人類学では、ヒトが類人猿から進化してきた過程を調べることで明らかにしている。

イ ヒュームがイギリス経験論の視点から実証した共感の存在を、進化人類学では、狩りをするチンパンジーたちの行動の差異を分析することで明らかにしている。

ウ ヒュームが各自の経験の内省を通して実証した共感の存在を、進化人類学では、チンパンジーとヒトの幼児の集団行動を比較する実験によって明らかにしている。

エ ヒュームが内観から実証した共感の存在を、進化人類学では、「私たち」という集団認識がチンパンジーにも備わっていると証明することで明らかにしている。

〔問5〕⁽⁵⁾ここに、たとえ倫理の成り立つ基盤が自然のなかに存することが

が実証されたとしても、なお倫理学が引き受けるべき役目が残っている。とあるが、「倫理学が引き受けるべき役目」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人間が利他的な行為をしなければならぬ根拠を追究すること、利他的行為の必然性に対して人々が抱く疑念に、答えていくこと。

イ 現代の科学の実験に基づく実証を内観的な視点から解き明かすことで、倫理の基盤となる感情の存在に、細かな検討を加えていくこと。

ウ 観念的な思索に基づき現代の科学の矛盾を説明することで、人間に対する利己的な存在者というイメージの誤りを、正していくこと。

エ 人間が利他的な行為をするようになった原因を説明することで、共感能力を効果的に発揮できる状況を、人為的に構築していくこと。

〔問6〕本文の構成について説明したものとして、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 感情に関する自説を示した後、哲学と科学の先行研究をもとに、自説を補強している。

イ 一つの主張に対し、新たな疑問点を提示して考察する形で、段階的に論を深めている。

ウ 現代までの研究の成果を取り上げ、問題点を指摘しつつ、末尾で自説を提示している。

エ 哲学的視点と科学的視点を比較し、哲学的視点の優位を主張して、まとめとしている。

〔問7〕ヒュームの主張を踏まえると、人とかかわりの中で私たちはど

うあるべきだとあなたは考えるか。本文を踏まえ、「共感」という言葉を必ず用い、具体的な事例をあげながら、あなたの考えを二〇〇字以内にまとめて書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、
、や。や」などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

『徒然草』（第八十二段）には、次のようなことが記されている。少し長いが、これこそ、〈ひらがな〉というものの性質を考える上で、ひじょうに重要なので引用したい。

「うすものの表紙は、とく損ずるがわびしき」と人のいひしに、頼阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覚えしか。一部とある草子などの、同じやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が、「物を必ず一具にととのへむとするは、つたなきものすることなり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覚えしなり。

——「薄絹で装幀した本の表紙は、傷みが早くて困る」と嘆く人がいた。それに対して、私の友のひとりである頼阿が「薄絹の表紙は、上下の縁の部分が擦り切れてほつれている方が、また、巻物の螺鈿の軸は、散りばめた貝がはずれて落ちた後の方が、味わいがあつていいものだ」と言ったのには、感心したのだった。

何冊かをひとまとめにして一部とした草紙などの本で、各冊の大きさが揃いだと、みつともないと思うのがふつうだろう。しかし、弘融というお坊さんは仰る。「品物をきつちり同じように揃えようとするのは、ものの命がわからない人間のすること。不揃いこそがよいのである」と言ったのにもまた我が意を得た思いがした。

すべて何も皆、ことのととのほりたるはあしきことなり。しのこしたるを、さてうち置きたるは、おもしろく、⁽¹⁾ 生きのぶるわざなり。

「内裏造らるるにも必ず作りはてぬ所を残すことなり」と或る人申し侍りしなり。先賢のつくれる内外の文にも、章段のかけたることのみこそ侍れ。

——すべて、何事も、すべて完全に整い、完結しているのは、かえってその仕事の命が終わることになってよくない。やり残した部分を、そのままに放置してあるのは、味わいも深く、仕事の命を将来に繋いでやる方法なのである。

「内裏を造営するときも、必ず未完成の部分を残すものだ」とある人が言われたそうである。そう言えば、古代の賢人が書かれたお経や儒学の經典にも章段が欠けたものが少なくない。

作者の吉田兼好は「すべて、何事も、すべて完全に整い、完結しているのは、かえってその仕事の命が終わることになってよくない」と言う。漢字と中国建築が持つ様式美からすれば、こうした価値観はまったく驚くべきことであろう。

⁽²⁾ いや、それはヨーロッパの価値観、さらには中国の影響を強く受けていた朝鮮半島の国々、またヨーロッパの影響を強く受けてきた明治以降の近代、現代の日本人からしても、なかなか理解できないことに違いない。

薄絹が擦り切れた表紙、螺鈿の美しい貝の光がはげ落ちた巻物の軸、本の大きさが揃っていない不格好なひとまとまりの本、天皇の住まいにさえわざと一部を未完成にして残すこと……⁽³⁾ こんなことが、なぜ、〈ひらがな〉の美意識と関係があるのかと問う人もあるだろうか。

〈カタカナ〉が「片仮名」で漢字の片側だけを取り、また日本語になりきらない部分を片方だけ残しているという点からすれば、〈ひらがな〉

だけでなく、〈カタカナ〉も似たような不格好な日本的な美点を備えているとは言えよう。

しかし、〈ひらがな〉は、それをさらに進めて、擦り切れて、はげ落ち、不格好で、未完成であるという特徴がある。

「まさか！」と人は言うだろう。

だが、「平」という言葉にしても、「平和」などという熟語にしてみれば良くも見えるが、じつは、「平凡」などという熟語であれば「ありきたりの」「安っぽい」というあまりいい感じのするものではない意味がある。

現代では、おおよそ「通俗 平易⁽⁴⁾」という意味で「ひらがな」という名称になったとされるが、これも、中国の高尚な文化水準で書かれる漢字漢文に対して「幼稚でわかりやすい」という意味であることに変わりはない。

〈ひらがな〉は、「あ」が「安」、「い」が「以」、「え」が「衣」と、ほぼ全部が漢字の草書体から作られている。

このことについては、また詳しく述べるが、草書体というのは、秦始皇帝^{しこうてい}のとき（紀元前二二二年頃）に作られた隷書^{れいしょ}を崩した字体で、古代中国のいずれの王朝でも、決して、正式の文書を書く場合に使われるものではなかった。

すなわち、〈ひらがな〉は、すでに半分崩れてしまった漢字の形を利用しているということになる。

このことは、『徒然草』の半分崩れたようなものを美しいとする言葉にまさしくピッタリと合う美意識を表しているのである。

（山口謡司「〈ひらがな〉の誕生」による）

〔注〕 頓阿——鎌倉時代の僧。

螺鈿^{らでん}の軸——青貝をちりばめ装飾した巻物の軸。

弘融^{こうゆう}僧都——鎌倉時代の僧。

内裏^{だいり}——天皇の住居。

〔問1〕⁽¹⁾ 生きのぶるわざなり。とあるが、本文の筆者はこれをどのような解釈しているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 何事であれ、整った状態にしないのは、人の手が加わることを極力避ける発想があるためだ、ということ。

イ 何事であれ、完全な状態にしないのは、物事を一つの形に固定せず未来に可能性を残す方法だ、ということ。

ウ 何事であれ、そのままで放置しておくのは、物事の熟成を促し新たな評価を導く方法だ、ということ。

エ 何事であれ、不格好なままにしておくのは、完全ではない人間の姿を反映させる発想があるためだ、ということ。

〔問2〕⁽²⁾ いや、それはヨーロッパの価値観、さらには中国の影響を強く受けていた朝鮮半島の国々、またヨーロッパの影響を強く受けてきた明治以降の近代、現代の日本人からしても、なかなか理解できないことに違いない。には、表現上どのような効果があるか。その説明として、次のうちから最も適切なものを選び。

ア 他文化の影響を受けている例を挙げ、『徒然草』の価値観も、中国文化の影響を受けていることを暗示する効果がある。

イ 歴史的な視点から、近代以降、日本人の価値観が『徒然草』の価値観と大きく隔たってしまったことを強調する効果がある。

ウ 中国文化の価値観と対比することで、『徒然草』が、中世でも全く新しい価値観に基づくものであったことを暗示する効果がある。

エ 外国人は言うまでもなく、同じ日本人でも共感することが難しい、『徒然草』の価値観のもつ特異性を強調する効果がある。

〔問3〕⁽³⁾ こんなことが、なぜ、〈ひらがな〉の美意識と関係があるのかと問う人もあるだろうか。とあるが、筆者はどのような関係があると考えているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 未完成なものがよいという『徒然草』に見られる感覚が、字形を進化させてきた漢字を用いた〈ひらがな〉の美意識に重なる、と考えている。

イ 古びたようなものがよいという『徒然草』に見られる感覚が、外国文化を密かに利用した〈ひらがな〉の美意識と関係がある、と考えている。

ウ 崩れたようなものがよいという『徒然草』に見られる感覚が、字形を崩した漢字を用いた〈ひらがな〉の美意識に通じる、と考えている。

エ 不揃いなものがよいという『徒然草』に見られる感覚が、漢字の一部分だけを利用した〈ひらがな〉の美意識とつながる、と考えている。

〔問4〕⁽⁴⁾ 平易とあるが、この熟語と同じ構成のものを、本文中の線部をつけた次のアからエのうちから選べ。

ア 引用
イ 表紙
ウ 美点
エ 幼稚

〔問5〕 本文の内容に合致するものとして、次のうちから最も適切なもの
を選べ。

ア 本文に引用されている『徒然草』の中で、兼好は、頓阿と弘融僧都の
考えに賛同しながら更に独自の見解を加えている。

イ 『徒然草』中の書物に関する部分を引用し、兼好の友人たちの言葉には、
当時の知識人の考え方の特徴が現れていることを指摘している。

ウ 『徒然草』中の兼好の言葉を引用し、物を大切に扱うこととひらがな
の成立には、共通した思想が認められることを解き明かしている。

エ 本文に引用されている『徒然草』の中で、兼好は、昔から伝わる言葉
の意味の重要性を暗に示している。

4

国

国

五

日